

福井県文書館研究紀要

第 4 号

福井県文書館講演

泰澄と白山信仰 本郷 真紹 1

論 文

戦国大名朝倉氏知行制の展開 松浦 義則 17

木谷藤右衛門家と福井藩関係文書 長山 直治 31

資料紹介

若狭浦方の手習資料

桜井市兵衛家の資料群から 柳沢芙美子 49

福井藩家中絵図(山内秋郎家文書)を照合する 吉田 健 57

平成19年 3 月

福井県文書館

福井県文書館講演

泰澄と白山信仰

本郷 真紹*

はじめに

1. 『泰澄和尚伝記』の伝える泰澄の生涯
2. 『泰澄和尚伝記』の特色
3. 古代北陸文化の地域特性

はじめに

今、ご紹介いただきました本郷でございます。1982年に私が京都大学大学院に進学しました折、恩師の岸俊男教授が福井県史の古代部門を担当しておいでになりました。その頃ちょうど福井県史の資料編編さんの準備作業が進んでおりまして、福井関係、越前・若狭関係の資料を丹念に拾っていくという作業を行っていました。この時、福井県史として特色のあるものにしたいということで設けられた『泰澄和尚伝記』の諸本の異同をつきあわす作業を私がさせていただきました。

資料編が発刊され、続いて通史編が出るということになりました。残念ながら資料編が出されたその時には岸俊雄先生はお亡くなりになっていましたが、そのあとを京都府立大学の門脇禎二先生が古代部会の部会長を継がれまして、資料編を編さんさせていただいた経緯から、引き続き泰澄と白山のことについて調べて認めよという命を請けたわけでございます。それで、通史編の方も泰澄と白山信仰という一節を担当させていただくようになりました。

直接その件がきっかけになったというわけではございませんが、たまたま1992年から4年間富山大学の人文学部で教鞭を執らせていただくことになりました。その意味ではいろいろな形でこの北陸に関わらせていただいて、自分なりに新しく勉強させていただくことができたというふうに思っております。

96年に立命館の方に移りまして、しばらくして、ちょうど福井県史でお手伝いさせていただいたことがきっかけとなって、1999年の正月から1年間、ご当地の福井新聞で「泰澄に問う現代」という連載を、合計91回にわたってさせていただきました。その連載は、毎週（週2回の時もありましたが）大体1600字ほどのコラムを載せていただきましたので、以前県史の編さん作業の時には気が付かなかったことや、それに付随するようなことを自分なりに改めて勉強させていただきました。その時の連載記事をもとに『白山信仰の源流』という本を出させていただくことになりました。ですから最初に関わらせていただいてからだと23・4年の間、白山関係のことについて、いろいろと考えさせていた

* 立命館大学文学部教授

だいたという、そういう経緯がございます。

私は元々専門が考古ではなく文献史学です。ですから先程申しましたように『泰澄和尚伝記』をベースにしながら、そこから読みとれるものは何か、そういう課題で始めました。実は先行研究をひもといてみますと、この『泰澄和尚伝記』というのはそれまで重視されていないようで、泰澄というお坊さんが実在したかどうかということについても確証はもてない。唯一宮内庁の所蔵する古写経のなかに泰澄という署名のあるものがあると。それぐらいしか奈良時代の痕跡はありません。しかも、この泰澄の署名が本当に越前の白山を開いた泰澄のものであるかどうかということ、確証はない。したがって、いろいろ説はありますが、先行研究の総括をいたしますと、どちらかということ泰澄の実在論に関しては、懐疑的なむきの方が強かったように思います。

泰澄という個人の伝承については、確かに後世付け加わった部分がある。物理的に考えてもおかしいと。これはまあ、高僧の伝記にはよくある話ですが、100俵もの米が本当に空を飛ぶのか、あるいは都との間を瞬く間に行って帰ったりできるのかとか、そういう霊験譚はよくある話です。しかし、だからといって『泰澄和尚伝記』そのものを荒唐無稽な作り話であるという、最初からそのように卑下して捉える見方にはどうも賛同できない。といいますのは、綿密に『泰澄和尚伝記』の中身を読みますと、今日まで我々が信頼するに足ると評価している、例えば奈良時代の正史であります『続日本紀』などでは、到底窺えない内容が含まれているのです。

950年前後に成立したという『泰澄和尚伝記』の奥書を信じるとするならば、泰澄の生きた時代からしますと、200年近くたって認められたことになるのですが、そこには何がしかの、今日我々が目にするのできない原資料に基づいて書かれた部分が大きかったのではないかと。紙に書かれた資料ではなくても、独自の伝承に基づいて作られた経緯があったのではないかと。そういう点に注目することによって、今まで見えてこなかった歴史の一面が見られるようになるのではないかとというように、改めて『泰澄和尚伝記』の重要性を実感して、別の角度から『泰澄和尚伝記』の伝えるものを調べさせていただいたというようなことでございます。

考えてみますと、歴史上の人物といいましても、いろいろと疑わしい部分が大きくて、今少し触れました奈良時代を扱った正史である『続日本紀』以降の国史になりますと、ある程度客観性をもった叙述になっていると言えますが、『古事記』や『日本書紀』などは、かなり造作された部分が大きい。

ちょうど今、卒業論文の口頭諮問の時期に当たっておりますが、『日本書紀』をまともに取り扱ってそれを根拠に立てている論をつぶすのはいとも簡単なんですね。他に史料がなくて、否定する根拠もないのだから使ってもいいんじゃないかと、そういう姿勢は絶対文献史学ではだめだということですね。やはり、石橋を叩いても渡らないぐらいの慎重な姿勢で史料を扱わねばならない。他に否定し去ることができないからすべてを信頼するというのは絶対だめだと。可能性としては考えられても、それが事実だという論理に認めてしまうとえらいことになる。

最近私が関心を持って調べました例で言いますと、少し本題からはずれますけれども、聖徳太子に対して書かれている内容というのは80%疑わしいですね。どう考えたって聖徳太子が冠位十二階を制定したり、十七条憲法をつくったり、仏教の興隆を認めたりするようなことはあり得ない。もし、聖徳太子なる人物がそういうことをやったとするならば、もともと聖徳太子は天皇の跡を継ぐ資格はなか

った。というのは、天皇というのは今でもそうですけれども、祭主ですから、一番大事な仕事というのは、日本古来の八百万の神々を祀るということです。

今日の我々は千二百数十年続いた神仏併祀の時代を経ていますから、別に仏と神が一体化していても、同じ家の中で仏壇と神棚があっても何の違和感もない。しかし、聖徳太子が生きた時代は、まだそこまで仏教に対する理解がなされてなかったし、受容もなされてなかった。そんな時代に、次の天皇になるべき人物が「篤く三宝を敬え」などと言えるのかということです。そういうところから、聖徳太子といった日本の国家的英雄の人物像についても、やはりもう一度慎重な姿勢で検証しなければならない。このように思っております。

史料を批判的に読み解き、そこから導かれる人物像なり歴史像というものを構築していくことは大変な作業ですけども、さしあたり今日は泰澄と白山信仰について、私が『泰澄和尚伝記』の分析をベースに考えてみたことを若干ご紹介申し上げて、まさにご当地の文化ですから、今後白山の問題を考えていただくひとつの素材としていただければというふうに思っております。

1. 『泰澄和尚伝記』の伝える泰澄の生涯

お手元にレジュメを準備させていただきましたので、そちらの方をご覧頂きたいと思います。おそらくご当地の皆さん方は基本的な泰澄の生涯についての知識というのは十分持ち合わせておられると思いますけども、論の関係で少しそれを確認しておきたいと思います。

(1) 泰澄大師は越の大徳または神融禅師ともいって、越前国の三神安角を父、伊野氏の女性を母として、天武天皇の白鳳22年(682)6月11日に生まれました。麻生津というのは現在でもその地名がありますけれども、福井市の、産所が訛ったのではないかといわれる三十八社町というところですね。

(2) 幼い頃から一般の児童とは異なり、泥で仏像を造ったりしていた。『泰澄和尚伝記』には子どもたちが外で騒いでいてもそれに耳を貸そうともせず、ひたすら泥を捏ねて仏像を造っていたというんですから、今流に言うところちょっと問題児ということになるんでしょうね(笑)。そういう若干奇行癖のようなところがあったわけですけど、その泰澄のもとに、持統7年(693)に道照(道昭)というお坊さんがこの地を訪れて、泰澄が神童であることを見抜いたというんですね。

道照というのは実在の人物でありまして、入唐して有名な玄奘三蔵の門下に入り、非常にかわいがられて三蔵が訳したばかりの経典を多数持ち帰ったといわれます。法相宗を日本に将来した僧とされるこの道照という人は、当代きっての仏教の中心施設であった元興寺の東南に禅院という施設を造って、そこで住まいしたといわれます。

この元興寺というのは飛鳥寺のことで、7世紀においては一番の仏教の学問所であった。舒明天皇勅願の百濟寺が大官大寺から大安寺と改められ、このお寺や天武天皇発願の薬師寺など、勅願によって造られた寺がありましたが、伝統的に国家随一の寺としてあがめられていたのは元興寺(飛鳥寺)でありました。天武天皇が諸々の寺々に対する経済援助の打ち切りを宣言した時にも、元興寺だけは国家から特別の扶持を与えるということを約束しているぐらいのお寺であります。

道照は一方で、いろんなところを廻って仏法を説いて歩く、あるいはそのことを自らの修行としたという記録も残っております。ですが、越前の国に道照がやってきたという記録はなくて、年代的な

ことから申しますとかなり高齢になってからですので、その可能性はあまり高くはありません。しかし、こういった日本仏教史上非常に有名な、大きな足跡を残したお坊さんが越前にやってきて、泰澄が神童であると見抜いた。頭の上に光輪がのっている、それは凡人の目には見えないけども、道照の目には見えたということですね。両親に対してこの子は特別だから大事にせよということを残して帰ったと、『泰澄和尚伝記』には出ています。

(3) 泰澄が14歳の時に、十一面観音の夢告を受けます。西の方に来なさいと言われ、越知峰の坂本の岩屋というところに通った。後年この峰に籠もって修行に励んだということなんですね。兄がその後を付けていったところ、その岩屋に入った。父母に報告するために急いで帰ったら、いつの間にか泰澄がさきに帰っていた。これもまた奇瑞のひとつとしてよく言われる話です。

(4) その間、大宝2年(702)に伴安麻呂が勅使として遣わされたとされます。『泰澄和尚伝記』には伴安麻呂と出てきますが、平安の初期から大伴氏が伴氏に代わりますから、正確に申しますと、大宝2年段階で伴氏という氏はないんですね。大伴氏のことです。この伴安麻呂すなわち大伴安麻呂という人物は、有名な大伴家持のおじいさんです。大伴家持のお父さんはこれも有名な万葉歌人の大伴旅人ですけれど、そのお父さんが大伴安麻呂という人ですね。確かにこの人は、大宝2年段階で官人であったということが確認されますから、そういった意味では歴史的な事実とそぐわない、別に間違っただけではありません。その人が勅使として遣わされて、泰澄をもって鎮護国家の法師に任じたというふうに書いてあります。

鎮護国家の法師というのを、どういうふうに受け取るべきかというのはいろいろと解釈はできます。日本古来の律令国家というのは基本的に個人身支配といいまして、一人一人を戸籍あるいは計帳というような文書に記録して、それに基づいて班田収授という、一定の口分田を班給し、死んだらそれを収公するというようなことを行い、またこれに基づいて、租・庸・調・雑徭という様々な税を課するという仕組みをもっています。そういった意味では今日の我々の戸籍や税の原簿と変わらないシステムをとっていたということですね。

したがって、個々人の年令や性別、特徴を正確に国家の方で把握しなければなりません。ですから、戸籍は6年に1回作られる。計帳という税の徴収原簿は毎年作られていた。こういうのを個人身支配という言い方をします。

その意味合いで言いますと、特権的な階級にあたるお坊さんという存在も国家が正確に把握しておく必要があった。正式に国家の側で得度が認められますと、その人はもちろん戸籍や計帳から抜かれて、僧尼名籍と言われる、お坊さんと尼さんを別に記録する原簿に載せられることになった。ですから、それから以降租・庸・調・雑徭というような一般の農民が賦課されるような税の徴収対象には含まれませんよ、ということになるわけです。

お坊さんの立場からすると免税を受けるということですね。その僧尼名籍というのは基本的に所属するお寺ごとに作られますから、そのお寺に何人のお坊さんがいるというのをこの僧尼名籍を通じて国家の側は把握し、お坊さんの生活に必要な物資を支援する。こういうようなシステムを取るんですね。

したがって、古代において得度するということは、免税特権を受けるということの意味です。

逆に言うと、誰しもがお坊さんになると国家の方は非常に困るんですね。ですから、国家は僧尼の身分というものに対しては、極めて厳格にこれを統制しにかかった。優婆塞・優婆夷と呼ばれる、得度を目指して修行している人々が、国家の官許を経ますと、沙弥・沙弥尼という正式の出家者になる。ここから授戒を経て、比丘と比丘尼という身分になる。これが一般的なんです。

いずれにしましても、国家の側にとって、自らの希望に応じて出家を許していたのでは、一般の国民は統治していけないということになります。したがって厳格な得度の制度というのを設けた。持統10年に施行された年分度者の制度というのがありまして、得度を許されるのは毎年国ごとに10人。1年間でせいぜい500人ぐらいの新しい坊さん尼さんしか生まれられないということになるわけです。農民にとっては苛酷な収奪から逃れることができるということで、お坊さんになることを望む人が多かったんですけども、この年分度者の枠にはいるというのは大変なことでした。したがって、国家の許可を得ずに勝手に自分でお坊さんの身なりをして、出家者だと称して生活する者もあった。あるいは乞食(こつじき)といって村々を廻って物乞いをする人もいた。そういう行為を私度といいます。これは今日流に言えば無免許運転と同じです。だから当然のことながら、取り締まりの対象になったということなんですね。

しかし奈良時代の諸々の資料をみてみますと、私度のお坊さんや尼さんというのは、自由に活動していた。そのことをもってして、国家の仏教統制なんていうのは有名無実で、最初から国家はそんなことは望んでなかった、仏教というのは大切なものだったんだというような主張もあります。それは間違いであって、法の原則というものと、それがどれだけ厳格に取り締まれたかというのは別問題であって、あまり厳格に取り締まれてなかった、取り締まれてない例が見受けられるからといって、法そのものが最初から有名無実だった、国家は形だけのものだったんだと決めつけるのは乱暴な議論です。

お坊さん・尼さんになったらすべての税が免除されるということからすると、国家の方が最初から出家したい者は出家を許していくというような姿勢をとるわけがない。今日と違って情報管理に物理的な制約がある当時の段階においては、農民が収奪から逃れようとほかの地へ逃げたら、それを把握するのは難しい。把握したら浮浪人ということでその地で浮浪人帳に登録して税を取ろうとした。ところが一方で逃亡とよばれる人は、どこへ行ったかも分からない。実態と法の建前の乖離は、いつの時代でもやむを得ない部分があって、それをもって法の基本的なスタンスそのものを否定するというのはやっぱりおかしい。

何が申したいかというと、おそらく泰澄をもって鎮護国家の法師に任命したというのは、この時点で泰澄が正式の度縁をもらった、つまり得度したということをお願いいんだらうと思うんですね。だから、それまでの泰澄の行動、越知峰に籠もって修行したというのは、身分的には優婆塞としてやっているわけで、これは俗人である。もっとも、国家の側から勅使が下されたというのは多少誇張であると思いますが、度縁をもらったことによって結局彼は正式のお坊さんとして所遇されることになったということであろうと。

(5)そしてこの702年に能登島という島から小沙弥が訪れて、やがて泰澄の身の回りの世話をするようになり、臥行者とよばれるようになった。この臥行者は北海の行船から米を徴収し和尚に供して

いたということなんですね。

残念ながら今越知峰に登りますと、日本海は見えません。ですから、今の越知山が越知峰として間違いないとするならば、あそこのてっぺんから舟を見張ってそこから米を徴収するということは不可能ですね。だから、ちょっとこの辺のところは現実から離れたところがあります。越知峰が別のところにあるとしたらまた別ですよ。しかし、こういうこともすべて荒唐無稽な作り話だとばかりは言えない部分があって、実は日本海の沿岸地域で、公海がすぐ見渡せるような山にお寺が造られた例というのは多いんですね。

そのお寺から下を見てみると、沖合を航行する舟はすぐ見える。どこまで遡るか、平安まで、奈良までいかどうかというのは微妙なところですけども、中世あたりになって、ある程度各地域の勢力が独立採算的に自らの生活を営むようになってまいりますと、海を航行するのもその地域に住む人にとってみたらひとつの権利として、今の漁業権と同じようなもので、認められるようになる。そこを通る舟とかあるいは湊に立ち寄って食料や水などの供給を受ける舟から津料という通行税を取るんですよ。お寺はそういうことをやってたのではないかと。そう考えてみると、後世の実態を反映したものであると思いますが、越知峰からというのはさておき、ある山のてっぺんに住んでおるお坊さんが、日常的にすぐ麓のところの海を航行する舟から米のお布施を受けて、それを自らの生活の糧としていたということは、あり得る話なんです。

(6)ところが、和銅5年(712)に出羽国から中央の朝廷に納める米を運搬してやってきた舟の船頭の神部浄定という人物が、ここに積んでいるお米はすべて朝廷に納めるべき米なので1粒たりといえどもお布施にすることはできない、と断ったわけですね。徴収の役割を担っていた臥行者が非常に怒った。失礼だということで怒った途端に、その舟に載っていた米俵はすべて空を飛んで越知の峰に来襲したという。

この米俵が空を飛ぶなんていう話も、あちこちに同じような話が残っています。一番有名なのは皆さんもよくご存じの信貴山縁起に描かれた米が空を飛ぶ話がありますし、同じように宗教的な施設で言いますと、播磨の法華山一乗寺という法道仙人ゆかりの寺に、米俵が空を飛ぶという説話が残っております。

これも確証はないんですけども、なぜ米俵が空を飛ぶかということ、山の高いところに宗教的な施設があって、山の上にお布施の米を引っ張り上げるのに、今でいうところのケーブルのような、綱を引っ張って谷と谷を渡すような運搬の道具を多分使っていたのではないかと思う。日本ではこういうものを描いた絵巻物はないんですけど、中国では残ってるんですね。だから麓のところに出張事務所みたいなものがあって、そこで航海する舟から一定の米のお布施を受けますと、おそらくはそのようなケーブルに積んで山のてっぺんの本寺まで、運んでいた。そうしたらロープでつるされた米がズーっと上げられてますから、下から見てる人にとっては、まるで米俵が飛んでいくんやなとかたちで見ていたと。そういうようなことが、モチーフになってるんじゃないかと考えられます。

その舟の米は1俵残らずすべて越知峰に来襲した。そこで、あわてて神部浄定は泰澄に対して済まないことをしたと謝ります。泰澄は、これは臥行者がやったことで、謝るんだったら臥行者に謝れと。そこで臥行者に謝ったところ、1俵だけ残してあとは返してやると。返してやると言っても越知峰の

上に99俵どうやって積み直すのかというと、瞬く間に99俵が飛んで舟の上にまた積み重なっていったといひます。神変不思議な出来事に感銘した神部浄定は、その米を予定通り朝廷に納めた後、出羽国へ戻らずに泰澄に弟子入りして、浄定行者と呼ばれるようになったということです。

(7) 次に、泰澄が霊龜2年(716)に再び夢の中に非常に気高い女性が現れて私の元へ来なさいとお告げを受けた、ということで養老元年(717)に母親のゆかりの地である白山の麓の大野隈苔川東伊野原というところに来宿した。伊野という地名は現在でも残っております。泰澄のお母さんの伊野氏というのは、その女性だったのでしょう。『泰澄和尚伝記』には苔川と出てきますけれども、これはおそらく九頭竜川のことと思います。苔川は、本来は菅川であった可能性がある。九頭竜川は菅川という別名を持っておりまして、「菅の渡」という渡し場が現在でも残っています。比較的伊野原から近いところですから、九頭竜川の近くの東伊野原にやってきたということで間違いのないということですね。

ところが、そこで再び夢告を受け、ここはお母さんがおまえを産み落とした産褥の地である。自分は違うところにいるからこっちに来なさいと言われ、泰澄はその東の林泉、これが現在の平泉寺白山神社のあるところですね。そこに今でも泰澄が夢告を受けてやってきて、神が現れたとする泉が残っております。

(8) その平泉寺白山神社の林泉で、白山神の化身である貴女が名乗りをあげ、自分は妙理大権現という、と告げます。この平泉寺白山神社は、やがて越前の馬場、中宮と言われます。ちょうど越前側の白山への登り口になるこの地域に泰澄がやってきたという伝承が出ているわけですね。

(9) さらにそこから、泰澄が白山天嶺の禅定、つまり霊山の頂上に登りますと、緑碧池があり、その側で、最初九頭竜王が現れます。泰澄が本体ではなかろう、自身を現せというふうに言ったところ、いよいよ御本尊の十一面観音が現れてきたということです。

(10) 泰澄はさらに左孤峰で聖観音の現身である小白山別山大行事、右孤峰で阿弥陀の現身の大己貴を感得して、これが白山三所権現を構成するということになります。以降泰澄はこの峰に住することになったということです。

これが白山入山の経緯として『泰澄和尚伝記』の中に描かれていますが、非常に興味深いのは、もともと白山神は女性の形をもって現れた。そして、最初伊弉諾尊であると名乗ります。ところがそれは仮の姿であって、実際には妙理大権現と名乗ったということですから、本体は仏教の菩薩であると言っておる。

この権現というのは、神仏習合した後に現れるひとつの神格でありまして、神様は神様なんですけど、例えば家康なども自分のことを東照大権現だというふうに言っています。権現の権というのは、仮ということなんです。現は現れるですから、権現という言葉は仮に現れるということなんです。例えば、大納言に準ずる位として権大納言というのがある。権大納言というのは大納言より下です。となると、仮の姿ではなく本体って何なんだ、それが仏なんだ、それが菩薩なんだよ、という理屈になります。

だから妙理大権現であるということを神自身が語ったという時点で、自分の本体は別にあると言っているわけなんです。もっとも、これは『泰澄和尚伝記』の中では養老年間の話ということですが、

養老年間にはどういう資料をひもといてみても、権現という観念があったことは確かめられません。おそらくは平安時代になってからの観念が影響されたんだろうと思います。

では、そういう可能性というのは全くないのか。泰澄は一体何を見たのか、ということになります。実はこの北陸という地域の特性を考えれば、養老年間に神様が仏様の仮の姿であるというようなことを訴える可能性、要するに、中央でも他の地域でも認識されていない独特の神と仏の関係というのが北陸地域では形成されていた可能性があるということを申し上げたい。つまり、神仏習合がひとつの帰結点とするならば、それをいち早く体現したような信仰があったという北陸地域の存在した可能性はあるということです。これはまた後で詳しく申し上げます。

(11) ここから養老6年(722)に浄定行者とともに都に赴いて元正天皇の病の治療にあたった。その効あって、護持僧として禅師の位を授けられ、諱を神融禅師と号したということなんです。

この護持僧というのは、実はこの時代にはありません。平安時代になって出てきます。天皇や崇貴な人々の身边の加護にあたるようなお坊さんのことを護持僧という。しかし、奈良時代に同じような役割を帯びたお坊さんというのはいたわけであって、大抵の場合、そういう人は一般的に看病禅師という言い方をします。

この禅師というのは白山禅定の禅とも通じるんですけども、今禅師というと禅宗のお坊さんのことを言います。古代において禅師というのは、基本的に山林修行僧のことです。山林修行を積み、呪力を得た人のことを禅師と言う。泰澄は紛れもなくこの禅師なんですね。

共通して言えるのは、それだけ長年の間難行苦行を山林で修したお坊さんというのは、共通して卓脱した治療能力を身につけています。病気を治す能力です。実はここに元正天皇の看病に従事したと書いてあるように、朝廷の高貴な人々にとって、お坊さんのさまざまな能力の中でも、実は治療能力が一番意味があるんです。この能力を有する人を高僧と認識する。教学的に非常に高度な解釈能力をもっているお坊さんがいても、それがどれだけ優れているかということは、一般の人々にはわかりません。天皇たりといえども、いくらお経の解説をされても、評価することが難しいわけです。ところが、例外なくどんな人々でもこの僧はすごい僧だと思うのは、自分の病気を治してもらった時です。お坊さんが高貴な人々から重視されるのは、大抵この治療能力によるんですね。

奈良時代に高僧として伝記などに名を残すお坊さんのうち、病気を治す能力を片鱗も窺われないというのは、私の調べた範囲では1～2割しかいない。皆さんご存じの奈良時代の高僧で言いますと苦難の末に日本に渡来し、授戒の作法を伝え、また唐招提寺の開基となった鑑真の卒伝が『続日本紀』の中に収められています。その伝記を読みますと、鑑真というのは失明して目も見えなかったのに、ひとたび匂いを嗅いだらそれがどんな薬かすぐに見分けたとあります。これは授戒と何の関係もありません。このことが『続日本紀』という国家の正史の記録に残っているわけです。ということは、鑑真が渡来した意義は、確かに授戒の作法を伝えたことも大事なことだったけれども、薬物を嗅ぎ分けるといふこの力にもすごく高い評価をしていたということを示しているわけです。

この鑑真以外にも、東大寺を造るのに一番功績のあった良弁、良弁と親交のあった慈訓という興福寺のお坊さん。かれらはすべて僧綱として国家の仏教行政に中心的な役割を担った人ですけども、すべて聖武天皇の病気の時に大きな功績を残したということを示す理由に、僧綱の位を上げられている。良

弁は東大寺の造営に尽力したから大僧都になったのではなくて、聖武天皇の看病に従事したから大僧都になったと。こう書いてあるわけですね。

そういった点からしても、やはり天皇にとってみると、自らの病を治してもらおうということが一番大きな僧侶から受ける功德ということになる。したがって、それにうまく成功した坊さんというのは大体高い評価を受けて、高い位を授けられ、高僧として伝記を残すようになる。泰澄は、もちろん直接中央に赴いて元正天皇の治療に当たったなんてことは中央の記録にはございません。しかしながら、泰澄が越知峰や白山で艱難辛苦の修行を積んだということをもってすれば、当時の観念からすると禅师たるにふさわしい。それだけの治療能力を兼ね備えておるということで、元正天皇の病の治療に当たられ、こういう伝が形成されたと考えられます。

泰澄という個人に限ったことではありませんけれども、天皇の病気というのは国家の一大事ですから、その時にはかなり広範囲に勅使が遣わされ、名望のあった、つまり治療能力にたけているという噂の高いお坊さんと呼んできて、看病の任に当たられたという例は史料に窺われます。

ですから、泰澄であったかどうかは別にしても、おそらく越前のそういう修行僧がこの地域で非常に高名となり、その噂が中央にまで及んでいたとするならば、勅使が派遣されて中央に呼び出され、天皇の看病に従事させられたという可能性は十分にあります。そういう意味では、これも荒唐無稽なものとして否定し去ることはできない、ということです。

(12) 神亀2年(725)7月には白山妙理大権現に参詣した行基と会い、行基の質問に答えて種々の現瑞などを語り、極楽での再会を誓った。この行基というのも、非常に有名なお坊さんであちこち遊行したといわれます。行基集団というのは畿内を中心に大々的な社会福祉事業を展開していたということでもありますけども、行基が越前にやってきたという記録は中央には残っておりませんし、『行基年譜』などを見ましても、そんなことは書いてありません。ですから、このあたりのところも後世の付加だということになるんでしょう。ただ、行基に関する伝承というのは結構広範囲に広がっておりまして、越前・若狭などにも行基ゆかりの寺とか行基ゆかりの仏像というのはたくさんありますから、そういう風潮のなかで、このような行基と泰澄が直接面談したというような話が形成されたと思います。

行基ではないにしても、中央の志あるお坊さんが地方にやってきて、その地方の有名なお坊さんと交流するという事は、他の例でも認められますので、僧侶同士の交流は頻繁に行われていたと考えていいと思います。そのようなところから、泰澄と行基というような1対1の関係が形成されたと考えられます。

(13) ついで天平8年(736)に泰澄は都に出て玄昉に会い、白山の本地仏である十一面観音の根拠の經典となる十一面経を玄昉から授けられたとあります。私が『泰澄和尚伝記』解読の作業をしているなかで一番興味を持ったのはこの部分であります。というのは、玄昉というお坊さんは、天平7年(735)に、入唐学問を修して帰ってくる。これは実在の有名なお坊さんです。玄昉は僧正になります。『続日本紀』に載っている玄昉の卒伝によりますと、玄昉は唐の皇帝、楊貴妃とのロマンスで知られる玄宗皇帝の厚い信任を受けて、内道場という唐の宮廷内の仏教施設に安置され、そこで紫の袈裟を賜ったということです。

それほど皇帝の信任を得たお坊さんでありましたので、帰国するに際して皇帝から、当時の中国に実在した全ての仏教関係の経論を授けられた。ご承知の通り、仏教の経典というのはインドから中央アジア地域を通過して中国に伝えられる。中国でそれこそ玄奘三蔵を始めとする大規模な訳経事業が展開されるんですね。三蔵はまだ新しい方で、もっと前の鳩摩羅什は200年ほど前から、お経の翻訳をやっていた。その翻訳された経典がだんだん蓄積されてまいります。唐の開元という年間に、皇帝が命令して、中国本土の中にあるすべてのお経を調べさせたところ、それが5千数百巻あったというんです。巻物にして5千数百。『開元釈教録』という当時の文献目録にその名前が残っています。

その総数が5千数百巻あった。玄昉は唐の皇帝から5000余巻の巻物をもってそれを日本に持って帰ってきたというのですから、おそらく、当時の中国に実在したお経の全てをもらったんだろうと。

これだけでも大きな業績ですが、当時の実力者であった聖武天皇の皇后の光明皇后をパトロンとして、写経事業が展開されました。彼女の皇后宮が所在した現在の奈良の法華寺というお寺の一角に隅院というお寺が設けられ、玄昉はそこに安置されます。

実は十一面観音に関するお経というのはたくさんあります。一番観音信仰で有名な、今でもよく各宗派で読まれる観音関係の経典というのは、俗に言うところの観音経です。ところが、この観音経というのはいわば通称でありまして、正確には独立した経典としての観世音菩薩経という経典はないんです。正確に申しますと、法華経の観世音菩薩普門品という一節なんです。そこだけとくに観音のことについて書かれているということで、観音信仰が高まってきますと、読まれることが多かったので、これが独立した観音経として扱われた。日本の正史などにも観音経として出てくるんですね。

しかしですね、玄昉が持って帰ってきたお経のなかで、これとは別個に十一面観世音神呪経という密教関係の経典があるんです。同じ観世音菩薩に関する経典と言いましても、先程紹介しました法華経の観世音菩薩普門品とは違う。平安時代になりますと、寺で行われる仏事というのは昼の御読経・夜の悔過とあって、昼の間にお経を読んで夜になると悔過をする。この繰り返りで大体仏事が構成されるようになる。で、この悔過の経典の一つとなるのが、十一面観世音神呪経です。

で、何を申し上げたいかということ、実はこの十一面観世音神呪経というのは、諸々の資料からして、まず玄昉が初めて日本に伝えたということは間違いはないんです。しかも玄昉自身、唐におけるこの経典に精通していた可能性が高い。中国ではかなり密教が盛んになっておりますから。玄昉は、この経典を根本として、悔過を日本の朝廷に勧めたと考えられる。

なぜそういうことが言えるのかということ、玄昉のパトロンとなった光明皇后が、自分の息子である基王の菩提を弔うために建てさせた金鐘山房という祠がありました。これが東大寺の前身です。現在の東大寺の東の方に、金鐘山房という東大寺の前身となる施設があった。今お話ししている天平8年の時点では、東大寺はできておりません。大仏造立ももちろん行われておりませんから、その以前の話ですけど、そのころに光明皇后の肝いりで始められたというのが、今日なお「お水取り」という俗称で続けられている東大寺二月堂の十一面観音悔過なんですね。

「お水取り」というのは夜に始まります。始まる時に大松明が上がります。実は仏事はそこから始まるんです。あの堂のなかで。

何をするかということ、自身の人間一般の罪汚れを全て告白して、十一面観音にその許しを請うわけ

です。許しを請うことを前提に今度は祈願をするという、これを一定期間のお籠もりの間やるのが二月堂のお水取り、十一面観音悔過です。その行法というのは、東大寺の実忠というお坊さんが始めたというんですけども、それを始めさせたのは光明皇后である可能性が強い。

だから、玄昉が持って帰ってきた十一面観音神呪経、また玄昉がおそらく伝えた十一面観音悔過の知識というものが、今東大寺二月堂のお水取りにつながるんですね。

面白いと思うのは、泰澄がその十一面観音悔過を玄昉から授けられたと書いてあるでしょう。これは実は『続日本紀』のどこをひもといても、わからないのですよ。だから、『泰澄和尚伝記』は、『続日本紀』の記事に尾鰭背鰭をつけてできたというふうに解釈している研究者もいたのですが、そんなこと絶対できません。これは、玄昉が持って帰ってきた十一面観音神呪経に基づく密教的な信仰というものがベースになって、それまでの日本にはなかった新しい十一面観音の信仰、それも密教的ということですからやがては神仏の混淆を導いてくるような、そういうものができたという下知識、正確な知識がなければこの一節は入らないんですよ。私が『泰澄和尚伝記』なんていうのは荒唐無稽と言って最初から卑下したらいけないというのは、そういうことなんです。

今皆さんにお話しさせていただいたことを論文に書いてちゃんと実証されたのは、既に亡くなられました東大寺の堀池春峰という先生です。この堀池先生が論文に書かれたのは20年ぐらい前の話です。考えてみたら、『泰澄和尚伝記』の成立年代よりずっと前の段階から、そんなことは分かってたということでしょう。それがずっと忘れ去られていたというか、見逃されていたというのか。だから、『泰澄和尚伝記』はそういう意味では非常に重要な示唆を行うと考えられます。

(14) 翌天平9年に天然痘が大流行して藤原武智麻呂・房前・宇合・麻呂という当時の朝廷の首班を全て葬り去ってしまった。その時にも泰澄は天然痘の鎮撫のために勅を受けてこの十一面法を行った。その効あって大和尚の位を賜り、諱を泰澄と号します。これも、泰澄自身が本当にそれを行ったのか、その功績を朝廷から顕彰されてわざわざ諱までもらったのかどうかということについては、他の資料がないから確証を得ることができませんけれども、少なくとも時期的な観点からすると矛盾はないということです。

(15) その後天平宝字2年(758)、これはもう晩年ですが、泰澄は白山を下りまして、越知峰の大谷仙窟、かつて自分が白山入山前に修行に励んだところに蟄居して、ここを入定の地と定めた。自分の死に場所はここだというふうに定めたけれども、この間神護景雲元年(767)には一万基の三重木塔を勸進造立して、勅使吉備真備に付けて奉った。この三重の木塔も有名で、現在でも法隆寺などにたくさん残っております。百万塔陀羅尼と呼ばれますが、時期的には全く矛盾はしません。吉備真備というのは当時の右大臣ですから、この人がいたということも間違いありません。ただ、わざわざ右大臣の吉備真備が泰澄からもらうためにやってくるのかということ、その辺はかなり疑わしいところがあり、後世そういった知識から付け加えられたということは否定できません。

(16) この年の3月18日に泰澄は予言どおり結跏趺坐し、大日の定印を結んで86歳で遷化します。その遺骨は石の柩に入れて大師房というところに葬られました。大谷寺に今でも泰澄の墓だというのがあります。これは元弘年間、14世紀の前半に造られた供養塔で、重要文化財に指定されておりますけれども、長年それは石の棺だという風な伝えもあったということです。

2. 『泰澄和尚伝記』の特色

奥書によりますと、『泰澄和尚伝記』は、(2)にあります。天徳元年(957)に、三善清行の子の浄蔵、この浄蔵というのは実在の人物で、天台宗の非常に有名なお坊さんですが、浄蔵貴所の口授した内容を、その門人で大谷寺を開いた者が記したものだと言われております。本当にこの年に作られたのかどうかというのはわかりませんが、現存する写本は正中2年、南北朝より少し前の1325年に書写された金沢文庫本、有名な神奈川県の称名寺の『泰澄和尚伝記』が一番古い古写本だということになっておる。

ここに書かれている内容で、すでに紹介しました以外で漏れているところだけ見ていきます。泰澄生誕の地・麻生津ですが、現在の福井市三十八社町に、真言宗の泰澄寺があります。ここは、『倭名類聚抄』という平安時代に書かれた書籍によると、越前国丹生郡朝津郷に相当します。古代、ここに北陸道の朝津駅というのがおかれていたと。つまり、ここは日野川水系と、北陸道という陸上の道とのちょうど交差点にあたる交通の要衝であったと。泰澄のお父さんの三神安角という人物はここで船頭をやっていたという伝承もあります。そういうところには、おそらく泰澄という人物を介して白山信仰と水運が密接な関係があったと考えられます。神部浄定というのも船頭であった。これが出羽国から米を運びにやってきて、米俵をとばすというような奇瑞にあって感銘して泰澄の弟子になったといったところからも、白山が実は河川を航行する、あるいは海上を航行する舟と密接な関係があったことを、おそらくは示してるんだらうと。

まさしく白山というのはランドマークに他なりません。航海してくる人々にとって、大きな目印になる、そういう存在であったところから、後々になっても白山は陸上の農耕民と同時に海民、海に生きる人々の信仰の対象ともなった。そのあたりが反映されているんだらうというふうに考えられます。

道照につきましては、先程申しましたので省略します。泰澄が初期と晩年に籠もったといわれる越知山ですけども、今の越知山が『泰澄和尚伝記』にいう越知峰として認めてよいとするならば、今の越知山というのは大体海拔613メートルの山。実はこの600メートルクラスの山というのは、全国的に見ましても、当時の山林寺院が設けられるのにもっとも標準的な高さの場所なんです。現在各地で奈良時代あるいはそれよりやや遡るのではないかとされる時期に至るまでの山林寺院の痕跡が見つかっております。山林寺院というのは、我々が寺院という言葉で想像する立派な伽藍を備えた寺院ではなくて、お坊さんが修行生活をおくるために営んだ庵のようなものです。

今でこそ立派になっておりますが、天台宗を開いた最澄が最初に建てた比叡山寺というのも元々は比叡山の山中に彼が営んだ庵がきっかけです。だんだんそれが拡張されて、今のような比叡山延暦寺になりました。

奈良時代のお坊さんについては、かつて大きな僧侶観の誤りがありました。平安時代になって最澄や空海という名だたるお坊さんが出てきて、彼らが体系的な密教を持ち込み、密教の宗派をうち立てた。それによって山林で修行するお坊さんの数が増えて、いわゆる密教的な修行というものが広がったと、こう解釈されていた。それでは最澄や空海が出てくるまではどうだったのかということ、平城京を見ればわかるように、東大寺や興福寺、大安寺といった大規模な伽藍の中にお坊さんは閉じこもり、ひたすら仏教の教義を勉強していた。奈良仏教というのはイコール学問仏教だった。平安時代になっ

てから修行仏教になったと、こう受け取られていたんですね。

これはしかし大きな誤りです。平安仏教というのは、奈良仏教がこれを導いたという点を見逃してはいけません。なぜ最澄が比叡山の山中に庵を営んだのかというと、べつに彼が若き頃から天台宗に目覚めてその教えに基づいて設けたというのでは決してありません。最澄というのは、元々は近江国の国分寺のお坊さんです。瀬田川流域にあった国分寺で彼は生活していたんですけど、おそらく一定期間修行のために比叡の山中に入った。ちょうどその麓に彼の出所である三津首の本拠があったということもあるんですけど、それで結局比叡山の山中に庵を結んだんですね。そこから始まる。

つまり、奈良時代のお坊さんというのは、1年の大半自分の所属するお寺の中で教学研鑽の生活を営んでいたのではなくて、月の半ばは今言ったような生活を送っているけれども、残りの後半は必ず山の中へ入って修行していた。所属寺院と山林とを往来する生活をしていました。やがてそういう二重生活の中から、山林修行をむしろ主とするようになったというだけの話であって、奈良時代から山林修行の風潮がなかったということでは決してない。

改めてそういう視点で5、600メートル級の山の頂上、これは明らかに人工的に切り開かれたと思われるところを実際発掘してみますと、たくさんその痕跡が見つかるということになるわけです。これが山林寺院といわれるものです。

泰澄の場合、その山林寺院に早くから居住して、修行の生活を送っていたとするならば、それは、最澄や空海の前駆となるような働きをしたお坊さんであるということになるわけです。最近有名な梅原猛先生が、泰澄は最澄・空海の前駆であるということを強調されています。

次に、能登島出身の小沙弥（臥行者）というのが出てきます。その能登島町に、有名な須曾蝦夷穴古墳というのがあります。これは日本でも珍しい三角隅送り技法という独特の造り方の石室をもった古墳で、これは類例からして明らかに高句麗式の古墳である。だから、能登島には、おそらく早い段階から高句麗文化の影響が及んでいたんだろうと考えられています。

実はこの対岸の七尾の石動山というところにも、越知山とよく似た山林寺院が所在しました。しかも、一説によると、この石動山は泰澄が開いたと伝えられます。

貴女（伊弉册尊）から九頭竜王、さらに十一面観音という変化が意味するものは、元々は恐れの対象となった竜の形をした神様から農業神（或いは渡来神）である女性へ、さらにその本地である仏、つまり神の性格の変遷を現しているのではないかとということなんですね。

神様というのは、元々は自然に対する畏敬の念から始まったものですから、山の神様というのは、山の恐ろしさから始まっています。だから、山というのは、時として形を変える。水源であって我々の生活の源であると同時に、ひとつ間違えば、例えば大きな嵐もそこからやってくる。大きな洪水もそこからやってくる。山の神が怒ると、我々の生活に大きな支障を来すという、こういう観念が抱かれた。だから、神様をなだめなければいけないというので、結局神に対する祭りが行われたわけですね。日本の祭りの原点というのはみなそうです。だから人間的な観念で受け止められますから、今でも祭りというのは、お酒を飲んでわいわい騒ぐのがいいのです。

神に対する祭りでは神に対する全てが捧げものですから、お酒でも、魚でも全てを神に捧げますよね。御神酒をそこで飲み交わすというのは、神と杯を取り交わす、つまり、皆さんがお仕事で行われ

る宴会の接待と同じなんです。接待って何のためにするのかといえば、接待された者が機嫌良くして、次の契約を頼む、そのためにやるわけでしょ。これが祭りです。

だから、僕はよく言うんですけども、仏に対する祭りと神に対する祭りというのは違うんですね。仏に対する祭りというのは、仏さんとどんちゃん騒ぎをするのではないと。だから、今も慣例的にやっていますが、仏壇に酒を供えるなんていうのは、本来は言語道断です。お父さんが好きやったからといって、生ものを供えている。仏教では、殺生は戒律に触れることになりますから、そういうことをするべきではない。

神様に対する捧げ物は、神様に差し上げるのですから、全部神様のほうに向けます。玉串奉奠で神を捧げるときでも、神を神様に向けるでしょ。仏壇というのは、そこに置かれた全てが仏の徳をたたく物ですから、本来仏に供える捧げ物なんてひとつもない。だから、花だってみなきれいな方はこっちを向いています。仏の徳を現すものとして置いているからこっちを向いている。神様の場合は全部神さんにあげるから向こうを向ける。この違いがあるわけです。今、それがごっちゃになっていることですね。

ところが、神様にも、次第に仏教の性格が入ってきます。正確に申しますと、神罰というのはあっても仏罰というのはいないんです。仏教の經典のいかなるところをひもといても、仏罰を規定した部分というのはいないんです。仏さんが自分の意志に基づいて、こいつは懲らしめてやろうと思って罰を下したとしたら、それは仏でなくなる。我が入りますから。こいつをかわいがって、こいつがかわいくないと言ったら、これで仏の我が入りますから、そのような如来は悟りの境地には達しておりません。だから仏というのは、哀れむことはあっても、自分の好みに応じて御利益を与えたり、あるいは罰を与えたりすることができないのです。定義からいうと。神様はできます。この白山でも神はイザナミの神であるように、山の神様というのは共通して女の神様。女の神様は嫉妬深から、山にトンネルを掘ったり、山に橋を架けたりするときに、開通式に絶対女性は立ち会わせてはいけない。どうしても、神様が嫉妬するからと、こうなってたわけですよ。

ところが、元々そういう性格であった神様が、後に神仏混合の時代を経ますと、性格が変わってしまうんです。荒ぶる神でなくなってしまう。全部温厚な神になってしまうんですね。そういう荒ぶる神、人々の全てから恐れられた存在から、だんだんと恵みをもたらす神へというふうに変わってきたというモチーフが、『泰澄和尚伝記』の中に現れているのではないかと。九頭竜王が出てきたというのは、かつての神様の姿を現しているのではないかと、これが言いたいことなんです。

山の神というのは、女神ですけども、十一面観音がその本体というのは納得できます。十一面観音というのは、観音像のなかでも最も女性的な形で現れされる仏像ですよ。本当になまめかしい様態で示される。しかも、十一面観音の顔はその時その時に応じて変わると。11の面を持っているという、この観音変化（へんげ）というのは、季節によって顔を変える山にはぴったりのイメージなんです。

白山でも、私は何度も福井に寄せていただいておりますが、季節によって全然顔が違いますよね、遠くから見た場合。どす黒く光ってる時もあれば、真っ白な時もある。同じ山が何でそういうふうに変貌を変えるのか。この容貌を変えるということは、観音変化とイメージ的にぴったり合う。そういう

ところから、おそらく十一面観音というのが最もふさわしい存在として受け止められたんだろうということなんです。

3. 古代北陸文化の地域特性

最後に確認させていただきたいのは、レジユメの最後の部分です。古代北陸文化の地域的特性、これだけをお話しさせていただいて、終わらせていただきたいと思います。

古代においては日本海沿岸地域こそが表日本です。今、表日本というと太平洋側のことを言いますが、昔からずっとそうであったと受け止めるのは間違っています。日本の文化は全て日本海沿岸地域から入ってきた。太平洋沿岸地域が表日本になったのはせいぜい19世紀以降のことです。日本はすべてそのことをまず忘れてはならない。だから、環日本海とか東アジア地域の文化の総合的な分析というのが大事になってくるのです。

その中でもとりわけ地理的に大陸との接点を持ちやすかったのは、この北陸地域です。大体偏西風と海流の影響で朝鮮半島の東側、あるいは付け根の部分から舟をこぎ出すと、若狭湾から能登半島にかけての地域にたどり着く可能性が一番高いんです。したがって文献資料などに残っている記録とは別に、おそらくは多くの海民の渡来が古代には起こっていたんだろうと。

そのことは、延喜式の神名帳という十世紀の頭に作られた全国の有名な神社一覧表みたいなものが現存しますが、その中に北陸三県の富山・福井・石川、こういうところの神社に明らかに渡来系の神様だと考えられる神社がたくさん出てくるわけですよ。これはもともと日本に土着の神としてあったものではなくて、おそらく渡来人のもってきた、彼らの在地の神々を祀ったのが受け継がれて伝わったものだろうというふうに考えられる。

敦賀という地名も、朝鮮半島からやってきた人物の名前がもとになった可能性が高いと私も思っております。そういった点からすると、この地域はまさしく、大和以上に先進的な文化地域であったと考えられます。

信仰面でいいますと、日本よりもいち早く朝鮮半島諸国あるいは中国の王朝は仏教を受け入れています。ただ受け入れるといっても、ご承知の通り仏教は多神教ですから、すぐにその地域の信仰と融合してしまうんですね。排他的ではない。正確に言うと、一神教であるキリスト教だって、入ってきた時に、在地の神々と融合している。

日本の場合、あるいはアジアの場合は多神教ですから、仏教の体制の中に在地の神々がどんどん融合してくる。日本の神々もまた、そういう形で仏教的な色彩をもった神と融合してこの地域では位置づけられたわけです。

泰澄が生存したといわれている養老年間に、初めて神が自ら仏教に対する信仰を訴えたという資料が残っておるのが気比神社です。その次の古い例が若狭彦神社です。同じように、奈良時代から神宮寺という神社の境内にお寺があったというのが確かめられるのが、織田町の劔御子神社です。それから石川県の気多神社です。集中してこの北陸地域、なかでもとくにこの福井にそういった痕跡が多く見受けられるわけです。

福井・石川というと別のようなですけど、能登・加賀というのは当時越前の一部でありましたから、

そういう意味では、コシの国・地域にこういう特色ある宗教文化が形成されました。実は、この地域の独特の、神仏混交した信仰の形態というものが、中央に対して大きな影響を与える。本来仏教なんて絶対崇拝してはいけなかった天皇がなぜ天平年間になって、ああいう大規模な国分寺の造立とか、東大寺の大仏の造立みたいな事業をやることができたのかということ、その時におそらく自らの仏教信仰を正当化するために、この地域の文化を受け入れたことによるのではないかと思います。

ですから、気比神社の例とか若狭彦神社の例で重要なのは、なぜ中央の資料に記されたかということです。地元の資料に伝わっているのだったら、地域の人がそれをそう言っていたからということです。すみません。そうじゃない。中央で記された『藤氏家伝』に気比神の仏教に皈依したいという記録が留められたということは、これは紛れもなく中央でそのような認識を受けたからに相違ありません。それがおそらくは聖武天皇の一連の仏教興隆事業を保証した。天皇が仏教を信仰したとしてもおかしいことはない。どうしておかしくないのかということ、もともと仏や神なんて一体化したものなんですよと。仏典をご覧ください。護法善神という神様たくさん出て来ませんか。これは仏の法を聞いて喜ぶ神様なんですよと。仏典の中に確かに護法善神はたくさん出てきます。

もちろん、インドの神であり、中央アジアの神々なんですけれども、日本の神様もそれと同じ。こういう位置付けを与えられたことによって日本の神々に対する祭りの総帥であった天皇が仏教を信仰することに何らためらうことはないという正当な論理が与えられるわけです。それで結局聖武天皇は出家し、出家した孝謙上皇は即位してまた天皇になると、こういうふうな宗教的にみると異常じゃないかという事態が出てきたというのは、じつはそういう地盤があったからと私は考えています。

したがって気比神社とか能登の気多神社とかに朝廷は破格の待遇を与える。朝廷の祖先神である伊勢の天照大神とそれに準ずるような高い待遇を与えているというのは、結局はそういうふうな恩があったということなんです。したがっておそらく、仏教の影響によって従来の、先程申し上げました、荒ぶる神の位置付けが変わってくると。こういった事柄もその先蹤を北陸地域の例に求めたんだとするならば、たしかにこの『泰澄和尚伝記』というのがひとつの中央の新たな文化の動向を導いた、越前における信仰の実態を反映したものだとして受け取って何ら間違いはない。だからひとつひとつの事実が史実かどうかということの問題にすれば、確かに後世付け加えられた部分とか、荒唐無稽だといわれる話もあるかもしれませんが、今申しましたように、本筋はおそらく中央での神仏関係にいち早くその模範例というか、先駆となる、天皇にとって助け船となるような論理と先例を提供したというのを、この『泰澄和尚伝記』は如実に語っているのではないかというのが私の考えなんです。

そういった思いで再びこの『泰澄和尚伝記』をひもといいてみると、非常に面白くなりますので、一応原文をあげてもよかったんですけど、資料として『泰澄和尚伝記』の全部の訳を配付させていただきましたので、これを見ていただいて、お時間のある時にゆかりの地を訪れていただければ、というふうに思っております。大変時間を超過しまして申し訳ございませんでした。これで終わらせていただきます。ありがとうございました(拍手)。